風間市長の 風のささやき

「五輪」

4年に一度の平和の祭典「オリンピック」。その北京大会が8月24日に閉幕しました。皆さんもテレビにくぎ付けになったことと思います。今大会での日本の金メダルは、柔道の内柴、石井、谷本、上野選手、競泳の北島選手（2個）、レスリングの吉田、伊調選手、そしてソフトボールの9個でした。さらに銀が6個、銅が10個の計25個のメダル獲得で今大会を終えました。

オリンピックに参加する選手は、各国の代表として国民の期待を一身に背負い出場します。だからこそ私たちは母国のアスリートたちに活躍を期待し、応援にも力が入るのです。そして勝利したときには自分のことのように歓喜し、そこに至るまでの練習過程や家族・兄弟愛、地元や会社からの温かい支援の話を聞くたびに感動が増します。今回はその中でも、ソフトボール日本代表の金メダル獲得に、身が震えるほど感動しました。上野投手の連日の力投もさることながら、投手と守備との信頼関係や、チームの団結力によって得た念願の金メダルは、見ているすべての人々に大いなる勇気と感動を与えたと思います。皆さんの中の最高の試合は何でしたか？

「五輪」とは、国際オリンピック委員会（IOC）の主催で4年ごとに開催される国際スポーツ競技大会です。古代オリンピック（古代ギリシアの4大祭典競技の一つで、エリスのオリュンピアの聖域で、ゼウス神にささげられた競技会）をモデルに、フランス人のクーベルタンの主唱で、近代オリンピックとして復興したものです。夏の大会と冬の大会に分けられ、夏は1896年アテネで、冬は1924年シャモニで第1回大会が開催されました。日本の参加は、夏が第5回大会、冬が第2回大会からとのことです。

最終日の男子マラソンの金メダリスト、ケニア代表のサムエル・ワンジル選手。仙台育英高校に留学後、日本の実業団でマラソンを学び、「日本の先生から教わった『ガマン・我慢』の精神が結果に結びついた」と優勝インタビューで話していました。とても親近感を覚えるとともに、日本の精神が海を渡って根付いていることにうれしさを感じました。この大会を通して、皆さんの持つ力を結集し、そして尊重し知恵を出し、魂を入れて生かす「共汗・共学・共生」が重要であることを見せていただいた気がします。何事も増上慢（※）的な個人エゴではなく、感謝の気持ちを忘れず「共に」の精神を持つこと、そしてはぐくむことが大切なのだと思います。

今月から仙台・宮城デスティネーションキャンペーンの本番です。市民一丸となって「共に」白石の魅力と素晴らしさを発信しましょう。そして白石の人と宝を輝かせましょう！

話は変わりますが、「凸凹」は漢字なのか、それとも記号なのか、皆さんはご存じですか？

【9月号の答え】

「学ラン」の「ラン」は、「オランダ」のランとのことです。江戸時代、オランダ人が着ていた詰め襟の服は「ランダ」と呼ばれ、明治に入り学生が詰め襟の制服を着ると、「学生用のランダ」という意味で「学ラン」と呼ぶようになったとのことです。

※増上慢：いまだ悟りを得ていないのに、得たものと思念しておごり高ぶること。

まちの話題 ～あの日、あの時～ Diary

2008白石夏まつり「白石音頭パレード」・「花火大会」

本年も白石の夏の風物詩「2008白石夏まつり」（同実行委員会主催）が開催され、8月11日には「白石音頭パレード」、12日には「花火大会」と、大勢の皆さんがふるさとの夏を楽しみました。

11日に行われた「白石音頭パレード」には、子供・大人の部合わせて21団体、1,532人の皆さんが参加。工夫を凝らした踊りやパフォーマンスを繰り広げ、沿道を埋め尽くした約2万6千人の観客から、大きな声援と拍手が送られました。

審査の結果、子供の部でアルバルクキッズが優勝、大人の部では医療法人社団蔵王会　仙南サナトリウムが2年連続で優勝しました。

また、12日の花火大会では約3,000発の大輪の光の花がしろいしの夜空を彩り、帰省した家族とともに、会場に詰めかけた約2万4千人を魅了しました。

▲子供の部で優勝した、アルバルクキッズの皆さんによるドッジボールパフォーマンス

応募方法　1人俳句三句、短歌三首、川柳三句以内。はがきに作品・住所・氏名・応募する壇名をはっきり書き、〒989-0292　白石市大手町1-1白石市総務課へ。**はがき一枚に短歌、俳句、川柳の併記は不可。**毎月15日締め切り。Eメールでも応募できます。（koho@city.shiroishi.miyagi.jp）

市民文芸

歌壇

岩崎　聰之介　選

いつの間に母に似たるか「どっこいしょ」逝きましてよりすでに久しき　佐藤　啓子

作りたる桃たずさえて桑折より来たる級友情けが染みる　高子うこん

汗だくに藁草履はきて荷車押すあの真夏日の長き坂道　後藤今朝雄

薬師の湯老いのからだをいたわりて湯舟に浸す梅雨寒の日に　八嶋　正子

風の朝旗なびかせて出る漁船を声の限りに送る妻たち　後藤　淑子

自己ベスト出して届かぬ予選落ち世界の壁の厚さまざまざ　四竈　英夫

早早と咲きし桔梗をたずさえてお盆来たよと墓に伝える　阿部みさ子

籠り居る暑さに外に出てみれば林の奥にかなかな鳴けり　寺崎　悦子

朝夕と花に水やる我が日課脱水予防にわれも呑みつつ　山田　濱

夾竹桃白き真昼の寺の庭過ぎにしことの蘇りくる　斎藤　典子

評　一首目、その声音もまた母上に似てこられたのではあるまいか。懐かしくこみ上げてくる思いが、下の句にこもる。

二首目、すうっと胸に入ってくる詠みぶりは、日頃のご努力、渋滞も嘘もない。

三首目、作者、少年の頃か。夏、忘れ得ぬ回想の歌。先を行く方はどなただろう。

俳壇

遠藤　秋尾　選

手摺まで霧のきてゐる山ホテル　山家　弘子

迎火や住まい変えしを迷はずに　斎藤　典子

絶ゆるなきダムの漣ななかまど　制野　リエ

亡き母が訪ねてくれし庭蛍　佐藤　孝子

夜通しの帰省の旅や薬師の湯　岩澤　伍峯

並び立つこけしの目にも秋の風　高子うこん

羽の国へ夕日飛び去り稲の花　跡部祐三郎

蝉時雨浄土のごとき孝子堂　服部　忠孝

夜涼みの庭で見ている星の数　大庭　良子

日々生きる夏の蔵王を力とし　跡部　祐子

評　一句目、到着した山のホテルで、テラスの手摺まで山霧が見る見る立ちこめる景を一句に。自然の神秘に感動された。

二句目、住まいを変えて、仏を迎えるための、お盆の迎火を焚く様子を一句に。ご先祖さまへの報告も込めて、少し大きめに迎火を焚かれたのであろう。

三句目、ダム湖に映るななかまどの真紅が、漣に揺れている景を美しく表現された。

柳壇

四竈　英夫　選

改造をしても支持率上向かず　山田　守

オリンピック金に涙の重さあり　高子うこん

この冬の悩みガソリン灯油ガス　寺崎　悦子

目が覚めて昨日と違う勇気湧く　草野　清

高齢者まずは元気のごあいさつ　阿部みさ子

美人でも大口開けて歯科医院　大庭　良子

値上げより医師の不足が気にかかる　遠藤　行夫

原油高笑いとまらぬ産油国　水戸　光穂

浴衣着て団扇片手にスニーカー　斎藤　典子

不景気で餌に心配牛のぐち　梶川善ご朗

評　一句目、支持率向上を狙った内閣改造も、一向に上がらなかった。そして突然の辞任劇に一億総唖然。「直前逃亡」の見出しが躍る。

二句目、金メダルの陰には、人知れぬ努力と苦しみがあったはず。メダルの色が濃ければ濃いほど。「感動と興奮残し五輪終え」

三句目、原油高は幾分鎮静化したものの、依然生活を脅かしている。冬を前に庶民の心配は尽きることがない。

ダニーの 国際コーナー InternationalCorner

「不思議な再会」

先日、オーストラリアの友人が私に会いに来てくれました。2年ぶりの再会です。私たちは共にユダヤ教徒で、カナダ出身の彼は、私が通っていたシナゴーグ（ユダヤ教の教会兼集会所）のラビ（ユダヤ教の聖職者）でした。

まさか白石で再会するとは思っていませんでしたし、私のアパートで宗教歌をヘブライ語で歌うのも、不思議な感じでした。同じオーストラリア国籍、同じ宗教とはいえ、私たちは別世界に住んでいます。彼はこの2年間、リュックサックを背負って世界を回りながらいくつかの学説を書いた、とても信心深い人です。世界を巡る旅の中で10カ国語を話せるようになったほか、さまざまな武道をマスターし、高い山の頂上では、何とお手玉をしてきたとのこと。まるで放浪者のような友人ですが、私に会うため白石まで来てくれました。

彼が来た日は金曜日。ユダヤ教の安息日で、太陽が沈んでから次の日の太陽が沈むまで、車や電車、バスに乗ってはいけません。ところが、その日彼は東京から各駅停車の電車で白石に来ようとしていました。待ち合わせ時間は彼らしく“4時15分ごろ”。仕事後、白石駅まで走りましたが、30分たっても来ません。彼は携帯電話を持っておらず、太陽が沈みかけても連絡はなし。5時15分になり、古ぼけたリュックサックを背負いながらようやく到着しました。そこからは大忙し。太陽が沈む前に買い物して2日間の料理を作らないといけませんし、友人は安息日の24時間に入るとシャワーもひげそりもできないので、彼が身支度している間に私が急いで料理を準備し、何とか日没の6時15分に間に合いました。

地球上には、さまざまな習慣や文化があります。彼は週一回の厳しい生活を通して、大切な文化を維持しているのです。日本ですと、伝統行事で着物を着たり、お盆にお墓参りしたりすることをイメージしていただくと分かりやすいでしょう。私は普段守っていない習慣ですが、久々にヘブライ語で歌ったり、食事の前後にお祈りしたりと、小さなことでもとても楽しめました。考えてみると、日本の方が浴衣や着物でお祭りに出る時の気持ちが、私の不思議な再会と似ているのではないかと思います。毎週では困るけれど、いつかまた金曜日に、その友人に来てほしいと思います。